

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02905

研究課題名(和文) 不登校と発達障害に関する実態把握と支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Assessing the Actual Situation Regarding Truancy and Developmental Disabilities and Creating Support Programs

研究代表者

小林 正幸 (Kobayashi, Masayuki)

東京学芸大学・特別支援教育・教育臨床サポートセンター・教授

研究者番号：70272622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害と不登校の関係について事例的に分析・検討し、同時に発達障害のある不登校児童生徒のための集団活動プログラムを整理・検討した。学校復帰に向けた支援機関でのプログラムについて、特性や支援ニーズ(発達障害の学習・行動・情緒・対人関係・生活面の特性)ごとに類型化したプログラムを編成し、不登校支援機関にてプログラムのモデル適用と有用性について検証した。その結果を踏まえ、「発達障害のある不登校児童生徒の小集団活動支援プログラム集」を作成し、活用しやすいようホームページへの公開準備も進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我国の主な不登校支援の研究には、不登校児の理解・把握、契機と問題メカニズムの分析による精神医学的治療モデルの検討、不登校児への直接/間接的な支援の実態について臨床心理学的視点による効果的な方法論の検討、学校内連携によるチーム学校体制の構築を進める学校カウンセリング的視点によるシステムの検討がある。しかし、その多くが個別支援を対象とし、本研究で扱う「発達障害」と学校復帰に向けた「集団活動プログラム」の視点からの検討は極めて少ない。また、不登校支援機関における支援プログラムの検証や質的な検討(学術研究)も少ない。そうした点に着眼して計画された本研究の学術的な価値は貴重なものと言える。

研究成果の概要(英文)：We analyzed and examined the relationship between developmental disabilities and truancy in case studies, and at the same time organized and examined group activity programs for truant children with developmental disabilities. We categorized and organized programs for returning to school according to the characteristics of the students and their support needs (learning, behavioral, emotional, interpersonal, and life-related characteristics of developmental disabilities). Then, we applied the program model at truancy support organizations and verified its usefulness. Based on the results, we prepared a "Collection of Support Programs for Small Group Activities for Truant Students with Developmental Disabilities" and made preparations to make it available on our website for easy use.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不登校 発達障害

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

学校教育相談を取り巻く現況として、発達障害のある児童生徒数の増加とその支援に関する課題は散見している。加えて、不登校、いじめや暴力行為等問題行動、児童虐待等の件数は増加傾向にあり、相対的貧困率も依然として高い状況において、心理的、経済的に困難を抱えている児童生徒が増加している(文部科学省, 2017)。発達障害のある児童生徒の支援ニーズと学校不適應について、障害特性と対人トラブル・問題行動、精神医学的な問題、不登校・仲間はずれ、生徒指導上の問題、学習の困難さに関する教育実践と調査研究は複合的な学問体系から多角的におこなう必要性が指摘されている(橋本, 2018)。そして、学校不適應の進行過程モデルから考慮すれば、二次的障害(不登校など)の早期発見、教育相談と支援方法、教育相談・特別支援教育コーディネーターとスクールカウンセラー等の支援体制について早急に実践研究を進める必要がある。多くの現況調査により、長期に及ぶ不登校児童生徒が依然として多いことが明らかにされている。不登校の要因として、「不安」が 31.1%と最も多く、次いで「無気力」の 30.2%であった。「不安」に関する内訳では、いじめ以外の友人関係や家庭の事情が多かった。発達障害のような個人因子を例にすれば、コミュニケーション行動の未熟さや社会性発達の偏りから引き起こしている可能性が推測される。本研究の準備研究の一つである久木田・橋本・小林ら(2018)は、適応指導教室を利用する発達障害が背景にある不登校児童生徒の実態や支援の困難さ、連携について調査した。約 6 割の適応指導教室に発達障害のある児童生徒が在籍し、その支援に困難さを感じる教職員が多かった。困難さの要因として①環境要因:「学校生活等の環境的問題」「家庭環境」、②個人要因:「本人にある特性や課題」「疾患・障害等による症状」に大別された。学校・家庭・専門機関の連携には実際の・コスト的な側面で制限が多く、その課題も多様に指摘された。三浦・橋本ら(2017)は、高等学校における生徒指導上の諸問題と現況、当該生徒に対する効果的な実践について生徒指導教諭から調査した。その中で、発達障害のある生徒への実践例が半数(47%)を占め、次いで不登校(27%)、非行(17%)、精神疾患(11%)であった。発達障害による教育的・生徒指導上の課題のみという単一問題の事例は 32%であり、一方で生徒指導上の問題が複合的にみられる事例(発達障害&不登校)が多数みられた。効果的な実践として、個別的・固有な支援(個々の障害・疾患や不適應の状態に応じた支援)と、共通的支援(全ての事例に共通した介入法)の各々が抽出された。海外ではあまり問題視されないために「不登校」に関する研究は従来から少なく、発達障害と不登校という関係性について腰をすえて切り込む研究や実践は国内にも見当たらないのが現状である。特別支援教育(障害臨床・精神医学など)と生徒指導・教育相談(臨床心理学・学校カウンセリングなど)という教育システム(方法論)と学問体系(研究分野)などの狭間や未連携から重要性や問題ばかりが指摘されて具体的な対策がなされてこなかった。一方、公的機関である通級による指導や教育支援センターの実践の多くは、学校復帰や学校適応、社会性の育成などを目指したグループ活動(体育、図工・美術、音楽、特別活動など)が主なプログラムであり、その活動の効果検証や生徒の実態、集団参加・意欲、学校復帰への道筋などの検討は充分になされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、全国にある教育支援センター(適応指導教室)やフリースクール、NPO 法人等による支援機関(以下、不登校支援機関と総じて称する)を利用する発達障害が背景にある不登校児童生徒のニーズや状態を細かく調査・分析し、発達障害と不登校の関係性や問題メカニズムについて検討し、その上で類型化を行い、その支援ニーズタイプ別の活動支援プログラムを作成することである。その研究成果として、『発達障害のある不登校児童生徒の小集団活動支援プログラム集』を冊子としてまとめ、全国に配布し、同時にホームページで公開する。本報告は、プログラム集作成にむけ実施した調査研究の分析・討論について述べる。

3. 研究の方法

・調査手続き・対象・内容と倫理的配慮

①関東 1 都 6 県にある公立の中学校通級指導教室 83 校、中学校特別支援学級(知的障害/自閉症・情緒) 411 校、知的障害特別支援学校中学部 624 校、知的障害特別支援学校高等部 715 校、合計 1833 校の教員を対象に質問紙調査を行った。回答のあった 805 名分のデータを分析対象とした。調査内容として、【1】フェイスシート(担当生徒数・教員年数)、【2】事例を 1 人抽出してもらい、その生徒に関する情報(対象生徒の学年/障害/出席状況)、【3】対象生徒のソーシャルスキル獲得状況、【4】対象生徒の“居場所感”有無への回答を求めた。

②全国のフリースクール 309 校の指導者を対象に質問紙調査を行い、回答のあった 94 名分のデータを分析対象とした。調査内容として、【1】フリースクールの概要(活動方針・プログラム内容等)、【2】ASD 児(疑いを含む)を 1 人抽出してもらい、フリースクールに通い始めた当初の状態と現在の状態について 4 種類の尺度(1. 自閉症スペクトラム症日本語版 10 項目: AQ-J-10, 2. 心のエネルギーを測る尺度, 3. 居場所感尺度, 4. レジリエンス尺度、※ 2~4 については複数の既存尺度を引用し再構成した)への回答を求めた。

調査依頼書にて、データは匿名化して使用するため個人情報保護されること、調査結果は統計的に一括処理をして特定の個人、機関に関する情報は公開しないこと、データ分析後、質問紙は責任をもって破棄すること、調査結果は概略を公開する形で報告することを説明した。

4. 研究成果

(1) 調査事例の集計と学校種・障害種からみた登校状況

回答が得られた805名のうち有効回答は618名(77%)であり、それをもとに分析を行った。今回の調査対象となった生徒の内訳は、登校している知的障害・発達障害生徒(以下「登校群」とする)390名(中学生246名, 高等部生144名), 不登校傾向の知的障害・発達障害生徒(以下「不登校傾向群」とする)58名(中学生27名, 高等部生31名), 不登校の知的障害・発達障害生徒(以下「不登校群」とする)170名(中学生87名, 高等部生83名)の計618名で、障害ごとに見ると、ASDのある生徒(以下「ASD群」とする)382名(中学生229名, 高等部生153名), ASDがなくADHDのある生徒(以下ADHD群とする)109名(中学生57名, 高等部生52名), ASD・ADHDどちらもいない生徒(以下「その他群」とする)127名(中学生74名, 高等部生53名)であった。ここで、登校群は「毎日出席している」「月一回未満欠席している」生徒, 不登校傾向群は「月1回以上, 週1回未満欠席している」生徒・遅刻や早退が顕著に多い生徒, 不登校群は「週1回以上欠席している」など年間30日以上欠席している生徒とした。さらに、登校状況・学校種・障害種のそれぞれの割合を算出した。登校状況の割合は、登校群63%, 不登校群28%, 不登校傾向群9%の順に、学校種の割合は、高等部42%, 中学部34%, 支援級20%, 通級4%の順に、障害種の割合は、ASD群62%, その他群20%, ADHD群18%の順に割合が高かった。また、学校種・障害種ごとに生徒の登校状況を整理したものが表1・2である。

表1 学校種からみた登校状況別生徒数(割合)

学校種 (N)	登校	不登校傾向	不登校
通級(26)	16(4%)	2(3%)	8(5%)
支援級(126)	83(21%)	10(17%)	33(19%)
中学部(208)	147(38%)	15(26%)	46(27%)
高等部(258)	144(37%)	31(54%)	83(49%)
合計(618)	390(100%)	58(100%)	170(100%)

表2 障害種からみた登校状況別生徒数(割合)

障害種 (N)	登校	不登校傾向	不登校
ASD(382)	249(64%)	31(53%)	102(60%)
ADHD(109)	81(21%)	11(19%)	17(10%)
その他(127)	60(15%)	16(28%)	51(30%)
合計(618)	390(100%)	58(100%)	170(100%)

(2) 登校状況・学校種・障害種からみたソーシャルスキル①・居場所感②

登校状況別・学校種別・障害種別に①ソーシャルスキル得点(関係維持スキル得点, 関係づくりスキル得点)の平均値を算出し, それぞれを要因として一要因分散分析を行った。同様に, ②居場所感得点(自己有用感得点, 本来感得点)についても平均点を算出し分析を行った。なお, 評定が満点の場合, ソーシャルスキル得点: 68点(関係維持スキル得点: 32点・関係づくりスキル得点: 36点), 中間点の場合, ソーシャルスキル得点: 34点(関係維持スキル得点: 16点・関係づくりスキル得点: 18点)となる。同様に, 居場所感得点56点(自己有用感得点: 28点・本来感得点: 28点), 中間点の場合28点(14点・14点)となる。

登校状況別に平均値を算出したものが表3である。①関係維持スキルでは大きな差異は見られなかった。分散分析では, ソーシャルスキル・関係づくりスキルで主効果が見られたため, 多重比較を行ったところ(Holm法), ソーシャルスキル・関係づくりスキル共に, 登校群>不登校群となった。②自己有用感では大きな差異が見られなかった。分散分析では, 居場所感・本来感で主効果が見られたため, 多重比較を行ったところ(Holm法), 居場所感・本来感で登校群>不登校傾向群>不登校群となった。ソーシャルスキルのうち関係づくりスキル, 居場所感のうちの本来感が, 各々に不登校と関連性が高いことが示唆された。ソーシャルスキルに関して, 不登校群は登校群に比べて友人との関係づくりスキルが有意に低いとした畠山ら(2004)の知見が, 知的障害・発達障害のある生徒においても支持されたと考えられる。

学校種別に平均値を算出したものは表4である。①いずれの学校種においても, ソーシャルスキル得点と関係づくりスキル得点は中間点以下であった。また, 関係維持スキル得点では大きな差異は見られなかった。分散分析では, 関係づくりスキルで主効果がみられたため, 多重比較を行ったところ(Holm法), 支援級≒中学部≒高等部>通級となった。②学校種のうち通級において全て低かった。分散分析では, 全てに主効果がみられたため, 多重比較を行ったところ(Holm法), 居場所感で中学部>高等部>支援級>通級, 自己有用感で中学部≒高等部>支援級>通級, 本来感で中学部>支援級≒高等部>通級となった。関係づくりスキルと本来感が共に高い中学部生徒で不登校が少なかったものの, 関係づくりスキルと本来感が共に低い通級指導教室の生徒では見られなかった。関係づくりスキルが相対的に高く, 本来感は中程度であった高等部の生徒で不登校が多いという結果が得られ, 関係づくりスキルと本来感の二つの視点で整理することは難しかった。このような結果が得られた要因の一つとして, 通級とその他の学級・学校の現況や生徒の実態の違いが考えられる。

障害種別に平均値を算出したものが表5である。①障害種のうちASD群において全て低かった。分散分析では, 全てに主効果がみられたため, 多重比較を行ったところ(Holm法), ソーシャルスキルでADHD群>ASD群, 関係づくりスキルでADHD群>ASD群≒その他群となった。以上から, 関係づくりスキルが低い生徒は不登校になりやすいことが示唆された。一方で, 関係維持スキルは不登校と関連性が低いことが考えられた。また, 関係づくりスキルにおいて, 通級の生徒は他の学校種の中で相対的に低く, ADHDのある生徒は他の障害種の中で相対的に高いことが明らかになった。②障害種間で自己有用感得点に大きな差異はみられなかった。分散分析では, 本

来感に主効果がみられたため、多重比較を行ったところ (Holm 法), ASD 群≒ADHD 群>その他群となった。以上から、本来感が低い生徒は不登校になりやすいことが示唆された。一方で、自己有用感是不登校との関連性が低いことが考えられた。また、発達障害 (ASD・ADHD) のある生徒は発達障害のない生徒に比べて本来感が高いことが明らかになった。登校状況別で見た際の不登校の生徒、障害種別で見た際に不登校が有意に多かった ASD・ADHD のない生徒、さらに学校種別で見た際に不登校が有意に多かった高等部の生徒に共通する点として、自己有用感>本来感であること、さらにその差が各種別の中で最も大きいということが分かった。

	SS		居場所感	
	関係維持	関係づくり	自己有用感	本来感
登校	34.2(11.5)		34.5(7.9)	
	16.6(6.0)	17.6(7.4)	17.5(4.6)	17.1(4.6)
不登校傾向	32.5(9.5)		31.7(8.0)	
	16.6(5.6)	15.8(7.2)	17.7(4.7)	14.1(5.1)
不登校	30.3(11.1)		29.1(9.1)	
	16.4(6.4)	13.9(7.4)	17.1(5.0)	11.9(5.4)
	SS		居場所感	
	関係維持	関係づくり	自己有用感	本来感
ASD	31.6(11.3)		33.2(8.2)	
	16.3(6.1)	15.3(7.2)	17.6(4.6)	15.6(5.1)
ADHD	36.4(10.9)		33.2(8.6)	
	15.9(6.1)	20.6(7.0)	17.1(5.1)	16.1(5.2)
その他	33.9(11.3)		31.1(9.4)	
	17.8(6.0)	16.1(7.9)	17.1(4.8)	14.1(6.0)

←表 3 登校状況別ソーシャルスキルと居場所感の平均値

↓表 4 学校種別ソーシャルスキルと居場所感の平均値

	SS		居場所感	
	関係維持	関係づくり	自己有用感	本来感
通級	29.3(8.9)		25.2(8.6)	
	16.5(5.3)	12.3(6.4)	13.7(4.0)	11.5(5.6)
支援級	33.0(12.0)		30.8(9.5)	
	16.6(6.6)	16.4(7.5)	16.1(5.3)	14.7(5.5)
中学部	33.0(11.4)		34.9(7.8)	
	16.2(6.0)	16.8(7.3)	18.1(4.5)	16.9(5.0)
高等部	33.3(11.2)		32.7(8.0)	
	16.8(6.0)	16.5(7.8)	17.9(4.4)	14.9(5.3)

←表 5 障害種別ソーシャルスキルと居場所感の平均値

(3) 不登校児童生徒の心理的回復過程の検討

1. フリースクールにおける活動方針とプログラム内容

活動の方針について、「1. 基礎学力の向上」「2. 学校復帰を目指す」「3. 進学・就職を目指す」「4. 居場所の提供」「5. その他 (自由記述)」の形式で、複数回答可能とし、回答を求めたところ、「居場所の提供」が最も多く、半数以上の回答者がこの選択肢を選ぶ結果となった。次いで多かったのが、「基礎学力の向上」であり、「学校復帰を目指す」「進学・就職を目指す」の回答も一定数あったことから、これらの回答の関連性も考えられる。また、その他 (自由記述) についての回答数は 30 であり、自由記述の内容を KJ 法により分類したところ、8 種類に分類された。次に、活動の方針についての回答から得られた 9 項目を用いて、平方ユークリッド距離 (Ward 法) によるクラスター分析を行った。その結果、4 つのクラスターに分類することができた。クラスター 1 : 「基礎学力の向上」「学校復帰を目指す」「進学・就職を目指す」の値が高い【学習重視型】、クラスター 2 : 「基礎学力の向上」「いきいきとした体験活動・学びの提供」の値が高く「学校復帰を目指す」が低い【学校復帰にとらわれない学び重視型】、クラスター 3 : 「居場所の提供」「自主性を尊重し、自己理解・自己肯定感を高める」の値が高く、基礎学力の向上「学校復帰を目指す」「進学就職を目指す」が低い【自由な居場所提供型】、クラスター 4 : 「社会で生きる力を育てる」「対人関係・社会性の向上」の値が高く「基礎学力の向上」が低い【社会で生きる力の育成型】と名づけた。一方で、プログラム内容について、「1. 学習指導」「2. ソーシャルスキルトレーニング」「3. 自然体験・課外活動」「4. カウンセリング」「5. その他 (自由記述)」の形式で、複数回答可能とし、回答を求めたところ、「自然体験・課外活動」の回答が最も多く、次に「学習指導」であり、どちらも回答者数の半数以上を占めた。「ソーシャルスキルトレーニング」「メンタルケア」の回答も一定数あり、回答者数の 3 分の 1 以上を占めていた。その他 (自由記述) についての回答数は 24 であり、自由記述の内容を KJ 法により分類したところ、5 種類に分類された。各クラスターにおけるプログラム内訳を図 1 で示す。

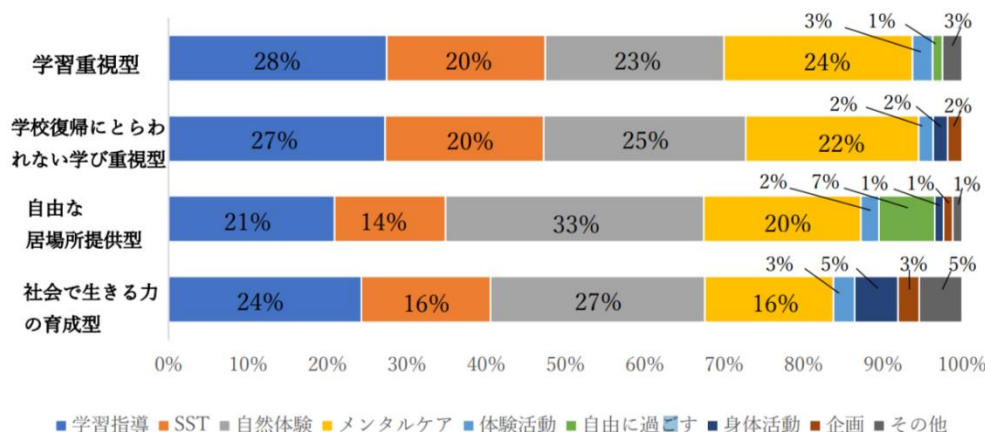


図 1 フリースクール活動方針タイプとプログラム内容

2. 心のエネルギー・居場所感・レジリエンスの変化について

心のエネルギーを測る尺度で、「フリースクールに通い始めた当初の様子（以下，“当初”）」についての回答と、「現在の様子（以下，“現在”）」についての回答の平均値について、対応のある t 検定を行った結果、「現在」の回答の平均値 ($M=3.56, SD=0.82$) が「当初」の回答の平均値 ($M=2.42, SD=0.88$) よりも有意に高かった ($t(90)=10.15, p=.000$)。居場所感尺度では、「現在」の回答の平均値 ($M=3.75, SD=0.83$) が「当初」の回答の平均値 ($M=2.30, SD=0.91$) よりも有意に高かった ($t(92)=12.01, p=.000$)。レジリエンス尺度では、「現在」の回答の平均値 ($M=3.24, SD=0.73$) が「当初」の回答の平均値 ($M=2.26, SD=0.63$) よりも有意に高かった ($t(89)=10.98, p=.000$)。全てにおいて「フリースクールに通い始めた当初の様子」よりも「現在の様子」の値が有意に高かったことから、一定期間フリースクールに通った不登校児童生徒においては心理的回復や不適応状態などの改善がみられることが明らかになった。

3. 心のエネルギー・居場所感・レジリエンスの変化についての回帰分析の結果

各尺度の「現在の様子」における得点から「フリースクールに通い始めた当初の様子」の得点の差の平均を「心のエネルギー尺度の変化量」「居場所感尺度の変化量」「レジリエンス尺度の変化量」とし、分析を行った。その結果、それぞれに有意な正の相関がみられた（居場所感尺度の変化量とレジリエンス尺度の変化量の間 ($r(88)=.673, p=.000$)、エネルギー尺度の変化量と居場所感尺度の変化量の間 ($r(89)=.687, p=.000$)、エネルギー尺度の変化量とレジリエンス尺度の変化量の間 ($r(86)=.769, p=.000$)）。居場所感尺度の変化量、レジリエンス尺度の変化量を説明変数、心のエネルギー尺度の変化量を目的変数として重回帰分析を行った。この結果、居場所感の変化量とレジリエンスの変化量は心のエネルギーの変化量を有意に予測していた ($R^2=.66$; 居場所感: $b=0.32, SE=0.08, \beta=.34, t(85)=3.96, p=.000$; レジリエンス: $b=0.67, SE=0.11, \beta=.54, t(85)=6.27, p=.000$)。居場所感尺度の変化量を説明変数、レジリエンス尺度の変化量を目的変数として回帰分析を行なった。この結果、居場所感尺度の変化量はレジリエンス尺度の変化量を有意に予測していた ($R^2=.45, b=0.50, SE=0.06, t(88)=8.53, p=.000$)。居場所感の高まりにより、レジリエンスが向上し、心のエネルギーが回復していくという過程が推測された。

4. ASD 傾向高群における各尺度の得点とレジリエンス尺度得点への影響

AQ のカットオフポイントである 7 点以上を ASD 傾向の高群、4 点～6 点を中群、0 点～3 点を低群とした。ASD 傾向の高群における、居場所感尺度の変化量、レジリエンス尺度の変化量を説明変数、心のエネルギー尺度の変化量を目的変数として重回帰分析を行った。この結果、レジリエンスの変化量は心のエネルギーの変化量を有意に予測していた ($R^2=.74, b=0.88, SE=0.14, \beta=.69, t(41)=6.33, p=.000$)。居場所感の変化量については有意な影響はみられなかった ($b=0.24, SE=0.12, \beta=.23, t(41)=2.11, p=.042$)。居場所感尺度の変化量を説明変数、レジリエンス尺度の変化量を目的変数として回帰分析を行なった。この結果、居場所感尺度の変化量はレジリエンス尺度の変化量を有意に予測していた ($R^2=.42, b=0.53, SE=0.10, t(41)=5.29, p=.000$)。ASD 傾向が高い児童生徒においては、学校での失敗体験や自己肯定感の低下などが ASD 傾向の低い児童生徒に比べて強いことが予想されるため、フリースクールという特性に合わせた個別的な学びの場で伸び伸びと過ごすことによって、レジリエンスが発揮されたり、居場所感が高まったりすることで、より回復の過程が顕著に現れたのではないだろうか。

5. 各尺度の下位尺度の得点と心のエネルギーに関する尺度得点への影響

レジリエンス尺度の下位尺度（楽観性・チャレンジ精神・統制力・関係志向性・自己理解・問題解決能力）を説明変数、心のエネルギーの変化量を目的変数として重回帰分析を行なった。この結果、楽観性は心のエネルギーの変化量を有意に予測していた ($R^2=.61, b=0.24, SE=0.09, \beta=.24, t(81)=2.70, p=.008$)。チャレンジ精神、統制力、関係志向性、自己理解、問題解決能力については有意な影響は得られなかった。同様に、居場所感尺度の下位尺度（自己有用感・本来感）を説明変数、心のエネルギーの変化量を目的変数として重回帰分析を行なった。この結果、自己有用感、本来感については有意な影響は得られなかった ($b=0.11, SE=0.09, \beta=.14, t(88)=1.17, p=.246$)。一方で、居場所感尺度の下位尺度（自己有用感・本来感）を説明変数、レジリエンスの変化量を目的変数として重回帰分析を行なった。この結果、自己有用感、本来感については有意な影響は得られなかった。レジリエンス尺度の「楽観性」と居場所感尺度の「自己有用感」が心のエネルギーに影響していること、同じく居場所感尺度の「自己有用感」がレジリエンスに影響を与えていることが明らかになった。「楽観性」と「自己有用感」が心のエネルギーの回復に影響を及ぼしていることから、リフレーミングによる楽観的思考へのトレーニングを測ること、役職を与えたり、受容・肯定したりすることで役に立っているという感覚を捉えやすくすることが有効であると考えられる。

以上のような知見をふまえ、発達障害と不登校の関係について事例的に分析・検討し、同時に発達障害のある不登校児童生徒のための集団活動プログラムの整理・検討した。学校復帰に向けた支援機関でのプログラムについて、特性や支援ニーズ（発達障害の学習・行動・情緒・対人関係・生活面の特性）ごとに類型化したプログラムを編成し、不登校支援機関にてプログラムのモデル適用と有用性について検証した。その結果を踏まえ、「発達障害のある不登校児童生徒の小集団活動支援プログラム集」を作成し、活用しやすいようホームページへの公開準備も進めた（公開にあたってはプライバシーに留意し匿名性の高い表現に記録などを書き換えする作業を行った）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 田中綾子・小林正幸	4. 巻 18
2. 論文標題 我が国における教師効力感研究の展望 - 不登校支援の観点から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京学芸大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡邊真帆・小林正幸・橋本創一・日下虎太郎・三浦巧也・竹達健顕・町田唯香	4. 巻 17
2. 論文標題 高等学校通常学級に在籍する発達障害生徒の自己理解に関する調査研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 早川恵子・松添万里子・小林正幸・大月友	4. 巻 16
2. 論文標題 子ども・若者の適応障害に対する効果的な支援に関する研究（1） - 時期により対象の状態像および支援はどのように変化するか？ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小林正幸・早川恵子・松添万里子・大月友	4. 巻 16
2. 論文標題 子ども・若者の適応障害に対する効果的な支援に関する研究（2） - 状態像によって支援にはどのように変化するか？ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松添万里子・大月友・早川恵子・小林正幸	4. 巻 16
2. 論文標題 子ども・若者の適応障害に対する効果的な支援に関する研究(3) - 適応障害の改善により効果的な支援は何か? -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 73-82
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 早川恵子・松添万里子・小林正幸・大月友
2. 発表標題 学校不適應の児童生徒への効果的な支援に関する研究(1) - 子どもの状態像及び支援者や保護者の関わりをどう評価するのか? -
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林正幸・早川恵子・松添万里子・大月友
2. 発表標題 学校不適應の児童生徒への効果的な支援に関する研究(2) - 時期による状態像および支援にどのような変化があるのか? -
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松添万里子・小林正幸・早川恵子・大月友
2. 発表標題 学校不適應の児童生徒への効果的な支援に関する研究(3) - 状態像の変化を規定する支援とは? -
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第52回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国立大学法人 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター（SCSC）	5. 総ページ数 21
3. 書名 学校不適応・発達障害ケースレポートミニハンドブック - 学校臨床心理学をもとにして -	

1. 著者名 小林正幸・早川恵子・霜村麦・橋本創一・李受眞・杉岡千宏・山口遼	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立大学法人東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター	5. 総ページ数 29
3. 書名 不登校支援のプログラム - 多様化する問題と民間支援機関&教育支援センター -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 創一 (Hashimoto Soichi) (10292997)	東京学芸大学・特別支援教育・教育臨床サポートセンター・教授 (12604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------